

ブラームスの声楽曲の社会学的研究

Study on Social Aspect of Brahms's Vocal Works

吉田 玲子

Reiko Yoshida

1. はじめに

ブラームスが作曲家として生活した 19 世紀後半は近代国家が成立、完成していく時期である。そのような時代、作曲家は作品によって自活をした。以前ならばパトロンの気に入る曲を作ったが、今度は購買者に興味を持ってもらう作品を作ることとなった。作曲家と購買者をつなぐのは楽譜出版社である。ブラームスが音楽界にデビューすることとなった最初の出版社はブライトコプフ＝ウント＝ヘルテル(以下、ブライトコプフと略す)である。ブラームスは 1853 年 11 月 8 日付ブライトコプフへの最初の手紙で、「手稿譜を手にもって私が公衆の前に出る歩みへと私を誘うのは、[……]」¹という表現を用いている。ロベルト・シューマンの庇護があったとはいえ、ブラームスはこの言葉をもって自分で楽譜出版社の門をくぐったのである。ブライトコプフは当時でもすでに 150 年近い歴史を持つ、ライプツィヒの老舗の大出版社だった。この大出版社と若いブラームスとの関係は順風満帆だったわけではない。ブラームスが、自分の音楽作品を世に出すために、どのような工夫をし、出版社とどのような交渉をしたか、ブラームスと出版社との往復書簡を追っている。その中で、ブラームスと出版社との立場の違いが鮮明に出ている作品 17 について紹介する。

2. ブラームスの出版社

ブラームスはブライトコプフを含めて 7 出版社と取引している。ブラームスの作品は作品番号で数えると 122 作品(作品番号なしの作品を除く)である。最も多く出版されたのは N. ジムロック社(以下、ジムロックと略す)で 80 作品、全作品数比 65.6%、次がリーター＝ビーダーマン社で 19 作品、同 15.6%、その次にブライト

¹ *Johannes Brahms Briefwechsel XIV*, S. 1. “[……]lich meine Manuskripte mitteilte, welcher mich zu dem Schritte führt, mit denselben vor die Öffentlichkeit zu treten.”